

書 評

出口晶子 著：『舟景の民俗 水辺のモノグラフィ・琵琶湖』

雄山閣出版 1997年10月
198ページ 2,400円（本体）

著者によれば「舟景」とは、舟をなかだちとしてあらわれる、ウミとオカの人やモノ、情報が交差しあう風景を指すという。「舟景」を切り口として、その風景をなしている水辺の暮らしの具体像と当時の環境観を掘り出そうと試みたのが本書である。

著者はここ数年、生業活動の民俗を通じてこれまでの人間と自然との関わり方を明らかにしようとする、いわゆる環境民俗学の視点に基づく研究を多く発表している。本書の内容も、そういった一連の研究視点上に位置づけられるものであり、本書の帯の紹介文にも「民俗学の試み」と評されている。

「環境」に多くの関心が寄せられるようになった現在、注目を集めている学術分野として、環境社会学や環境民俗学がある。特に主体と生活世界・環境観を重視し、生業活動から人間と自然との関わり方の来歴をとりだそうとする環境民俗学の視点は脚光を浴びている。本書のフィールドとなった滋賀県では、近年、この環境民俗学の視点を取り入れた県立琵琶湖博物館が開設され、江戸東京博物館にせまる勢いの入館者数を記録したことで話題を呼んでいる。

しかし、「環境」とはいうまでもなく地理学にとっても本来的なテーマであった。自然と人間との関係、つまり人間がどのように周囲の自然に働きかけ、また影響され、景観を形作ってきたのかという視角は、地理学の根底に絶えず存在している。このことは、大学改組が進む現在、地理学を含む学科・講座の多くが、「人間環境」「地域環境」などといった名称に改編されていることによってもわかる。しかし、今日、「環境」に関してきわめて現代的な課題とされる環境問題を論じる際には、地理学の担う役割は必ずしも大きくないにも思われる。「環境」という主題は地理学の本来的なテーマにもかかわらず、いつの間にか我々地理学者の手からすり抜けていきがちな対象ともいえるかもしれない。

こういった「環境」をめぐる研究動向の今日の

状況をふまえて、地理学の出身である著者が、環境民俗学の視点を取り入れた上でどのような「環境」研究にたどり着いたのか、本書はその足跡をうかがうことのできる内容となっている。

本書の特色として一貫しているのは、点景としての舟だけでなく、舟がつなぐオカとウミ自体にも目配りを忘れない著者の視点である。舟の積み荷の薪、その生産地である薪山と、そして運搬先での瓦生産など、舟によって結ばれている景観構成要素の個々に対しても詳細な分析がなされている。以下、各章の内容について具体的に触れる。

第一章では舟景とはなにかについて、その定義とともに、舟景研究の意義について述べられている。本書で語られる水辺の暮らしが、決して遠い過去のことではなく、生きて語られるほんの一昔前の経験であること、そして、水辺の景観を核とした地域おこしに象徴されるような、現代の地域文化の再生を視野に入れて論じることが言明されている。

第二章「ウミと船頭」ではまず舟そのものを考察の出発点として、船頭たちのモノグラフとその環境認識を扱っている。いわば船頭にとっての「生きられた世界」としての琵琶湖水面である。

第三章の「積み荷の山・里」においては、視野を舟の発着する岸辺・陸に広げて考察を続けている。丸子船舟運の主要な積み荷である薪、瓦土、山石といった在地性の強い産物を取り上げて、その産地であるオカの暮らしぶりまで明らかにした。

評者は、本書の圧巻は第四章の「水辺の環境変動と環境観」ではないかと考える。そこでは近江八幡市の八幡堀と内湖を舞台に、先の章で触れた湖北の薪山や湖東の瓦土採取といった人間活動が集約され、全体として一つの物資循環システムが成り立っていたことを明らかにしている。加えて、価値観の変容に伴う環境観の変化と、循環システムの崩壊について論を進めている。「オカの視点ではつながることのない個別の環境変動を船頭の経験を介して一連の連鎖としてとらえると、水運の衰退とは、水辺における複合的な社会・環境変動を論じるさいの重要な視角であることが見えてくる」という著者の指摘は、本書の真髄をなすものであろう。

続く第五章では、「丸子船の再生」として、琵琶湖博物館展示のための丸子船復元制作をとりあげて、その作業過程のみならず、かつての船大工の暮らしをモノグラフとして紹介している。

終章では、「離合の舟景」と題し、これからの水辺の暮らしの再構築に資するものとしての舟景研究の意義を説き、舟景に象徴されるような地域文化に対し、その遺産化からの脱却こそが今後の新しい行動指針となっていくことを説いている。

著者は本書の冒頭で、過去の水辺の暮らし方を論ずるだけでなく、現代の地域文化の再生に向かう道のりをも視野に入れたいとの研究意図を示している。現代の地域文化の再生とは、おそらく水環境を中心とした地域づくり・まちおこしの動向を指すものと考えられるが、この地域文化の再生に対する言及がやや具体性を欠き、理念論にとどまっているのが惜まれる。終章において、地域文化に関して、遺産化を脱し現代の生活に振り向けていくことで継承の可能性を掲示しているが、滋賀県ではそのような認識に基づく取り組みはすでに各地で行われており、現場で今求められているのは、現代化された生活の中に水環境とのつながりをどのように再構築していくかの具体的方策である。再生すべき地域文化の質そのものが問われている現段階においては、地域文化再生の道のりを論じるには、地域環境政策を含め、さらに一歩踏み込んだ議論が必要となってくる。

さて、本書で用いられたモノグラフという手法は、地理学、民俗学、社会学などにおいて頻繁に用いられる手法であるが、一集団あるいは一個人について詳細なデータを取り、諸事象を具体的に記録するものというイメージがある。本書の最大の特徴は、各事象を淡々と記録していくのみでなく、諸事象間の関係性を明らかにしているところにあると評者は考える。この点は、関係性の学問、総合的な視角としての地理学の真価が発揮されたものということもできよう。換言すれば、地理学の立場からは、「環境」というものが各事象の有機的な連関によって織りなされる複雑な複合体であることを提示し、環境問題に対しても、小手先の対症療法では決して本質的な解決策にはなりえないという警鐘を発するべきといえようか。

著者は終章において、現在の水辺の環境保全について触れ、「一昔前の多様な水辺の暮らしをすっかり忘れ、あるいはないものとして、水辺の景観を余暇としての親水などに狭めすぎてはいないだ

ろうか」との問いを投げかけている。評者はこの問いを、自然との関わり喪失・狭小化が環境問題の根底にあるという著者の視点だと理解する。この視点を持つことによって、本書は琵琶湖のモノグラフィからグローバルな環境問題への視角を引き出すことに成功している。「環境」という対象を地理学において再考する足掛かりとなる好著である。

(佐野静代)

加賀美雅弘 著：『ハブスブルク帝国を旅する』

講談社 1997年6月

286ページ 700円(本体)

学術書ではなく、講談社現代新書の一般読者向けの書物であるが、著者が自ら足を運んで調べ上げたハブスブルク帝国の、いわば「野外歴史地理学」の書物として、日本はもとより、外国でも例を見ないすぐれた出来の読み物であると判断されるので、ここで取り上げることにする。

本書の下敷きになっているのは、ウィーンおよびブダペストの古書店街で、著者がたまたま入手した3冊のオーストリア・ハンガリー帝国のガイドブックである。すなわち、*Illustrierter Wegweiser durch Kurorte, Sommerfrischen und Hotels* (1908), *Illustriertes Lexikon der Bade-, Brunnen-, Luftkurorte u. Heilanstalten* (1926), そして *Baedeker* の1903年版であって、本書は20世紀初頭のハブスブルク帝国の旅行事情を、当時のガイドブックによりながら吟味するとともに、それぞれの場所が現在どのようになっているかということ、現地を旅しながら報告したものである。第1次世界大戦後、帝国の版図は多数の国に塗り替えられ、現在は10以上の国に分かれているが、当時の旅行ルートは、当然のことながら、現在の国境線とは無関係に設定されていた。20世紀初頭の旅行が鉄道を主としてなされていたので、第1部においては、オーストリア・ハンガリー帝国における鉄道網の発達が紹介されている。ベデカーでは6つの自転車旅行コースも紹介されているが、すべてのコースがドイツ語圏である帝国の西半分にあり、また5つまでが山を越えて南の世界を訪れるコースであったという著者の指摘は興味深い。

第2部では、10のルートに分けて、歴史地理学的な探訪が報告されている。ウィーンと郊外リゾートへの旅における18世紀末の運河計画、ボヘミア森における馬車鉄道のように、それぞれの旅の記